【資料紹介】

E. N. Anionwu『メアリー・シーコール小伝　-看護師・学生のためのリソース』（英国看護協会、2005 年、p.46）

池田 法子

Elizabeth N Anionwu (2005)
A short history of Mary Seacole –a resource for nurses and students
:London, Royal College of Nursing

IKEDA, Noriko

１．　はじめに

本稿は、*A short history of Mary Seacole –a resource for nurses and students*(以下『シーコール小伝』とする)という小冊子において、メアリー・シーコール(1805-1881)という人物がいかに紹介され、特に看護師・学生たちに対して、彼女の業績やプロフェッショナリズムがいかなる今日的意義を持つとされているか、明らかにするものである。

メアリー・シーコールは、19 世紀にジャマイカ人の母とスコットランド人の父の間に生まれ、性別と人種の壁に直面しながらも、クリミア戦争において医療・看護に貢献した人物である。シーコールと同様に、クリミア戦争で負傷兵の看護に従事し、後に看護師の養成にも精力的に取り組んだフローレンス・ナイティンゲールとは対照的に、シーコールの存在は日本ではほとんど知られておらず、シーコールに関する先行研究もわずかである[1]。

一方、欧米諸国では、一度忘れ去られたシーコールの功績に対して、再び注目が集まりつつあるという[2]。本稿で紹介する『シーコール小伝』は、イギリス国内における看護実践の推進を担う代表的組織である英国看護協会(The Royal College of Nursing)[3]が、シーコールの生誕 200 周年記念として刊行したものである。そこで本稿は、『シーコール小伝』の紹介を通して、シーコールという一人の人物が生涯をかけた、看護職に対するプロフェッショナリズムの内実と今日的意義を探りたい。

２．『シーコール小伝』の概要

本書の著者である Elizabeth N Anionwu は、テムズバリー大学の看護学の教授であり、ロンドンスクールの衛生・熱帯医学の名誉教授である。また、彼女はテムズバリー大学における看護実践のために、自ら 1998 年に設立したメアリー・シーコール・センターの所長でもある。彼女は、シーコールの自伝を読んで初めてシーコールの存在を知り、シーコールの看護職に対する専門的知識と熱意、そして人種差別からの克服を強く尊敬してきたと

いう。さらに、彼女自身もアイルランドとナイジェリアの血統を引き継いでいることから、シーコールのアイデンティティにも共感を覚えたことを彼女は本書で明かしている。

本書は、全体で 45 ページ程のカラー冊子で、イギリスのロンドンに位置するナイティンゲール博物館で入手することができる。本書は、見開きの左側と右側が完全に独立して展開される構成となっており、見開きの左側は、シーコールが生まれた 1805 年から、本書が刊行された 2005 年までの年表となっている。この年表の内容の多くは、シーコールの自伝(*Wonderful Adventure of Mrs. Seacole in Many Lands*、1857 年初版)[4]を出典とするものである。年表における時系列は、①青年期(1805-1823 年)、②職業を学ぶ(1826-1853 年)、③クリミア戦争(1854-1856 年)、④戦争後の影響(1856-1860 年)、⑤晩年(1865-1905 年)、⑥認識の復活(1907-2005 年)に区分されている。

一方、見開きの右側はシーコールの業績と、社会がいかに彼女を記憶するかを議論する論考集となっている。これらの論考では、特に、シーコールに影響を及ぼした人種に対するイギリス社会の態度や、同時代を生きたナイティンゲールとの比較について考察が成されている。各章における論考の具体的な内容は、①実践の女性、②ヴィクトリア期イギリスにおける人種への態度、③インクルーシヴな職業、④記憶を生きたまま伝える、⑤シーコールとナイティンゲール、⑥シーコールの物語について学ぶ、⑦ある学生の観点、⑧メアリー・シーコールの今日的意義、となっている。

以下、『シーコール小伝』における年表と各論考から、ヴィクトリア期における人種への態度を社会的背景としてふまえた上で、シーコールが看護職に関わるようになるまでの自己形成と、クリミア戦争におけるシーコールの実践を中心に、実証的に取り上げていくこととしたい。

３．ヴィクトリア期における人種への態度

本書では、ヴィクトリア期における人種への態度が、複雑な様相を見せていたことが指摘されている。その「複雑さ」とは、帝国主義支配を拡大しようとしたイギリスと植民地の間における権力構造、そしてジェンダーの観点から理解される。ここでは、イギリスと、シーコールが生まれたジャマイカの両国での人種に関わる社会状況を概観したい。

ヴィクトリア王妃の統治(1837－1901)は、1833 年以降のジャマイカにおける奴隷制廃止運動の直後に始まった。17 世紀後半から英国植民領とされてきたジャマイカの主要産業は、黒人の奴隷貿易に依存した糖業であった。1830 年代からの奴隷制廃止運動を受けて、英国側は奴隷制解放のための諸策を講じたが、制度として奴隷解放を実現した後も、旱魃、増税、物価騰貴によって民衆は経済的に窮乏状況に陥ることとなった[5]。1865 年には黒人の小農民と農業労働者が、白人を中心とする支配層に対する大規模の反乱(ジャマイカ事件)を起こし、事件に関与した約 450 名が殺される他、600 名以上が厳刑を受けることとなった。結果的に、ジャマイカ事件はイギリス国内でも大議論を巻き起こしたのである。

人種に対する偏見がまだ社会に存在していたイギリス社会において、これらの奴隷制度の廃止をめぐる論点は、当初は「黒人は本当に白人と平等な地位にあると考えられるか」に集中した。人種や奴隷制に対する立場としては、奴隷制度によって莫大な利益を維持することを望む経済的富裕層や、「科学的人種主義(social racism)」によって白色人種の優越

性を支持する人々が存在した。中には、黒人に対する攻撃的な意見を持つ人や、異なる民主種族と関係を持つことに対する嫌悪感を示す人もいた。

ここで、18 世紀から 19 世紀にかけてのジャマイカ国内における人種に関わる社会状況について補足説明を加えておきたい。イギリスの植民地支配を受けていたジャマイカでは、奴隷社会の中でのヒエラルキーが存在していた。ヒエラルキーを形成した要因の一つとして、人種や血統の観点から、「カラード(colored)」と呼ばれる白人と黒人の混血が「エリート奴隷」として上位階層に位置づけられたことが通説とされている[6]。とりわけ、「カラード」の数は 18 世紀から 19 世紀にかけて増加しており、その多くは、白人男性と黒人女性の間に誕生した混血児であった。なぜなら、奴隷制末期におけるジャマイカでは、現地でのプランテーション経営を、イギリスから単身で渡った男性が担うことが多く、白人のほとんどが男性という人口構造にあったためである[7]。

また、奴隷社会のヒエラルキーを構成したその他の要因として、職能性が関連したことが明らかになっている。圀府寺は、高い「価値」をつけられることが多かった奴隷の役割として、「①ある特定の分野における〈熟練〉(技能奴隷、医者、製造所関係の奴隷)、②〈管理能力〉(農耕統率役、家畜管理役)、③突出した〈体力・腕力〉(運搬係、きこり)」[8]という 3 種類の能力のうちいずれかを備えているものと指摘している。すなわち、ある特定の分野に対する専門的な知識や管理能力を有するか、あるいは突出した身体能力を持っていれば、人種や血統に関わらず、「エリート奴隷」となることができる可能性があったのである。

ただし、医者や農耕統率役といった「エリート奴隷」の多くは、男性が占める一方で、女性はジャマイカの主要産業であった砂糖プランテーションの農耕奴隷における多数派であった[9]。中村和恵は、カリブ海周辺のアフリカ社会において、現地の女性たちは、白人であれ黒人であれ、それぞれの文脈において男性中心的な社会において「弱者」であったことを指摘する[10]。したがって、ジャマイカ社会における人種主義的な障壁は、ジェンダーという観点を加えればさらに複雑化し、女性にとってはより困難な社会状況であったと考えられる。

以上より、ヴィクトリア期のイギリスとジャマイカにおける人種への態度は、以下のようなことが指摘できる。イギリスでは、帝国支配を拡大させる一方で、奴隷制度の廃止をめぐる議論が活発化した。その背景には、富裕層による強力な経済力だけでなく、人種主義的な偏見があった。一方、ジャマイカ社会においても、奴隷社会の間にヒエラルキーが存在した。奴隷社会のヒエラルキーにおいて、優位な地位に置かれやすかったのは、白人と黒人の間に生まれた「カラード」や、医者などの特定の職業能力を持つ人々であった。特に、職能性による観点においては、「エリート奴隷」の多くは男性であり、女性は比較的に低い位置づけにあったと言える。これらの社会状況をふまえると、スコットランド人の父とジャマイカ人の母の間に生まれ、さらに女性として「看護」という職に携わっていたシーコールは、ヴィクトリア時代の社会状況の中でも独特のバックグランドを有していたと言えるだろう。

4．看護職としてのシーコールの自己形成

1805 年、メアリー・シーコールは当時、英国植民領であったジャマイカに生まれた。彼女の父はスコットランド人の軍人であったという記録があるが、詳細は明らかにされていない。一方で、シーコールの母親は、自由人の黒人のジャマイカ人だった。シーコールの母は、キングストンにブランデル・ホール(Blundell Hall)と呼ばれる下宿屋を所有しており、そこで「女医(doctress)」[11]としての実践もしていた。シーコールは、幼少期から母親の医療実践を間近に見て育ち、母親から地方の薬草を用いた処方を学んでいったという。

また、シーコールの青年期の自己形成におけるその他の重要な出来事として、二度の渡英が特筆される。一度目の渡英はシーコールが 10 代のときに親戚とともに過ごした 1 年間の滞在であり、シーコールは後に、この滞在中にロンドン市街で自分の肌の色を子どもたちになじられた経験があることを明かしている。さらに、シーコールは、1823 年に再びロンドンを一人で訪問している。このとき彼女は大量の西インドのピクルスを、保存して販売するために持ち帰ったという。さらにこの頃、シーコールはイギリス以外にバハマ、キューバ、ハイチといった中南米の諸島を旅している。これらのエピソードから、シーコールは 10 代の多感な時期から、医療に携わる自立心と行動力を培うと同時に、人種主義的な社会の矛盾を体験していたことが分かる。

二度の渡英を経てジャマイカに帰国したシーコールは、20 歳頃からブランデル・ホールに住みこみで母親の手伝いをしながら、看護に従事していく。シーコールはこのとき、黄熱病にかかった兵隊たちへの治療の手伝いもしている。それから彼女は、大火事によって焼失したブランデン・ホールの再建(1843 年)や母親の死(1844 年)などを乗り越えながら、医療のキャリアを積んだ。

1850 年代には、シーコールは 19 世紀以降に度々世界的に流行したコレラの治療にも携わっている。1851 年、シーコールはパナマにホテルを開いた兄弟を訪ねて自身もパナマに渡った際には、独力でコレラの治療に従事したという。この頃、カリフォルニアでのゴールドラッシュの影響で、アメリカ西部に渡るための主要な中継地の一つとして、至る場所からパナマへ人が集まっていた。さらにシーコールは、コレラで亡くなった乳児の検死解剖をパナマで実施したことを明らかにしている。このときの検視解剖について、シーコールは自伝において「私にとっては新しくて、断然有益だったけれども、男性医師たちはみなよく知っている結果でした」[12]と述べている。その後、シーコール自身もコレラに感染したが、克服している。このようにして、シーコールは医療の専門的知識と実践スキルを習得していったのである。

シーコールの家庭環境について、本書において詳細には触れられていないが、母親が医療に関わる専門的知識とともに施設経営をしていた点、そしてイギリス系の白色男性の血統を引いている点を考慮すると、シーコールはジャマイカ国内において比較的に上位階層にあったと推察される。しかしながら、ヴィクトリア時代のイギリス社会においては、肌の色に対する偏見が存在した。したがって、シーコール自身のアイデンティティと人種に対する態度は、葛藤と矛盾を抱えたものだった。本書によれば、シーコールは時には、自分より肌の色の黒い人やジャマイカの同輩に対して「否定的(dismissive)」[13]であったことが指摘されている。一方で、自身のスコットランド系の血統を誇りとすると同時に、白色

人種への優越性を表現する人々に対して率直に拒否感を示しているのである。

シーコールは、自叙伝において、自分が「医療(healing art)」[14]を学ぶことができたのは血統のおかげであることを認めている。しかしながら、その黒人の起源を持つ血統こそが、後にクリミア戦争で軍人に対する看護を申請した際に拒否される根源ともなったのである。

５．　クリミア戦争におけるシーコールの実践　ーナイティンゲールとの比較

1853 年、ロシアとトルコの間で対立が生じ、クリミア戦争が勃発した。翌年、ロシアの進出を嫌うイギリスとフランスがトルコ側の支援に回り、同盟を結んだ。1854 年秋には、ナイティンゲールがイスタンブルのスクタリ(Scutari)で負傷兵に対する看護を開始している。

その頃、シーコールはジャマイカで、ロシアに対する戦争が開戦したことを耳にすると、クリミアで看護師としてイギリス軍に尽力することを切望したという。クリミア戦争勃発時の心情について、シーコールは以下のように語っている。「どこかの戦争のことを聞いたら、私は一刻も早くその戦場を目撃したいと切望していました。そして、私がよく知っているたくさんのジャマイカ兵たちが行動を起こすためにイギリスへ旅立ったと聞くと、なおさら彼らと行動をともにしたいという願望は強まっていったのです。」[15]

1854 年の秋、シーコールはロンドンに到着し、クリミアでの看護を繰り返しイギリス当局に申請した。具体的には、戦争局(the War Office)、医療局(the Medical Department)、さらにはナイティンゲールに続く看護師の第二部隊の採用担当者といった複数の機関・人物にシーコールは申請したが、それらの努力は実らなかった。黄熱病やコレラといった強力な感染病の治療に対する専門的知識を有していたにも拘わらず、イギリス諸機関からクリミア戦争における看護実践の度重なる拒否を受け、シーコールはひどく失望したという。近年の研究では、シーコール以外にも、クリミア戦争における看護の出願を、人種のために拒否された例があることが明らかになっている[16]。

1855 年、シーコールは自力でクリミア半島への渡航費と医療物資を調達し始める。そのとき、シーコールの協力者となったのが、運送業のためにクリミア半島へ向かおうとしていたトーマス・デイ(Thomas Day)だった。二人は、軍人に対して食料や飲料を販売する「軍商人(sutlers)」として現地に赴き、同年 3 月にトルコに到着した。その後、7 月にシーコールとデイはクリミア半島で激しい戦地となったバラクラヴァ(Balaclava)の郊外に位置した軍基地の近くで、ホテルを操業したのである。そこでは、全ての地位の軍人に対して、宿泊所、食料や物資、そして看護ケアが供給された。シーコールが戦地で行った看護サービスの中には、彼女がそれまでのキャリアの中で身につけてきた伝統的な薬草による処方も含まれていたようである。

クリミア戦争が終結を迎える 1857 年 3 月まで、シーコールは戦場の前線近くで、地位や国籍に関わらない全ての軍人に対する看護サービスを継続した。クリミア戦争が終結した当時、施設内には過剰な物資と個人的な明細票が残り、シーコールは危機的な経済状況にあったという。それにも拘わらず、同年 6 月にはロンドン市内のマスコミがクリミア戦争におけるシーコールの存在を大きく報道し、彼女の戦地における貢献は社会的な評価を

獲得した。

シーコールとナイティンゲールの比較

著者は、シーコールとナイティンゲールは、両者の全く異なる看護における達成を評価すべきであり、シーコールを「黒人のナイティンゲール」というようにナイティンゲールの影に隠すべきではないと主張している[17]。シーコールとナイティンゲールは、両者ともにクリミア戦争において看護実践を展開したが、両者の実践はそれぞれ異なる長短を持っていた。端的に言えば、ナイティンゲールがクリミア半島から離れたトルコ本土の病院で優れた管理能力を発揮したのに対し、シーコールはより前線の近くで治療を行い、飲食物や休息の場を提供しようとした。シーコールとナイティンゲール自身がお互いに対して抱いていた印象については、あまり記録が残されていないものの、齟齬があったと見られることが本書で明らかにされている。

1855 年 3 月にトルコに到着したシーコールは、スクタリの病院へナイティンゲールを訪問し、短い面会をした後、その晩はスクタリの病院の洗濯係の部屋に宿泊したという。シーコールは後にバラクラヴァで何度もナイティンゲールを目にしたと記録を残しているが、詳細については述べていない。ただし、シーコールが抱いたナイティンゲールの第一印象としては、以下のような記録を残している。「…穏やかに、それでいて鋭い観察力とともに立っていました。いかなる時も、おそらく無意識的に正義へ歩んでいく、小さな行動に対する切望の最大のシンボルーそれがフローレンス･ナイティンゲールでした。その英国女性の名前は決して死に絶えることなく、その運命のときまで、英国男性の唇にはまるで音楽のように聞えるのです。」[18]この第一印象に対する記述を含め、シーコールのナイティンゲールに対する印象は概してポジティブなものであり、またナイティンゲールの方も自分について良い意見を持っていると信じていたという。

一方、ナイティンゲールは、シーコールについて複雑な感情を持っていたことが紹介されている。例えば、ナイティンゲールは、彼女の義兄弟にあてた手紙の中で、シーコールについて「彼女は、『いかがわしい所(bad house)』とまでは言わないにせよ、何かしらそれに似ていなくもないようなものを、クリミア戦争で維持しています。彼女は男性方に大変親切で、それ以上に役人方に対しても親切で、いくらか彼らのお役に立ち、そして多くの人を酒飲みにしています。」[19]という記述をしている。ナイティンゲールが人種的な観点にどの程度の影響を受けていたかは明らかではないが、少なくとも、彼女が当時のディケンズの小説に描かれているような「不潔でだらしない」看護師のイメージを変えることを願っていたことはよく知られており、シーコールが時には酒類を施設内で提供していたことには強い抵抗があったようである[20]。したがって、ナイティンゲールは、自身の病院で働く看護師たちとシーコールの間の交流を、積極的には取ろうとしていなかったことが紹介されている。

６．晩年から現在に至るまでの社会におけるシーコールの記憶

クリミア戦争におけるシーコールの貢献は、イギリスの公的な広報媒体としての役割を果たした『ロンドン・ガゼット(*the London Gazette*)』でも報道された。さらに、シーコ

ールの多額の負債を返済するための基金の設立に、『タイムズ(*the Times*)』や『パンチ・マガジン(*Punch magazine*)』が貢献し、1857 年には一旦シーコールは負債者ではなくなっている。同年、シーコールは自伝(*Wonderful Adventure of Mrs. Seacole in Many Lands*)を刊行し、一躍著名人となった。 それから数年間、シーコールはイギリス国内の軍事病院や兵舎を訪問して回っている。1859 年から 1865 年頃まではジャマイカに滞在しており、その後 1873 年にはイギリスでウェールズ王妃のためにマッサージ師をしたという記録がある。

シーコールは晩年を、イギリスとジャマイカの両国で過ごしていた。どこにいても、シーコールは公共の場で民衆に認知され、訪問者が途絶えることはなかったという。1881 年 4 月、シーコールは 76 年の生涯を閉じた。

クリミア戦争後の 1850 年代から 19 世紀末にかけて、シーコールの存在はイギリスとジャマイカの両国内において一般に広く知られていたが、20 世紀にかけてシーコールに言及した書誌の数は、ナイティンゲールに比較すると極端に少ないことが、本書で明らかにされている[21]。しかしながら、ジャマイカでは、ジャマイカ看護協会(Jamaican Nurses' Association)が 1954 年に新本部として開設した拠点を「メアリー・シーコール・ハウス」と名づけ、1960 年代から 70 年代にかけて、複数の協会会員が看護ジャーナルでシーコール関連の記事を掲載するなど、シーコールの功績を伝えるために重要な役割を果たしてきている。さらに、21 世紀初頭から、イギリス国内で再びシーコールに対する感心が高まりつつあるという。その契機となったのは、シーコールのドキュメンタリー番組の放映(2000 年)、「100 人の偉大な黒人のイギリス人(100 Great Black Britons)」[22]というネット上のコンテストでシーコールが 1 位となったこと（2003 年）、ロンドン中心部におけるシーコール像の設置運動(2004 年)、そしてシーコールの失われていた肖像画が発見されたこと(2005 年)であるという。

7．メアリー・シーコールの今日的意義

本書で述べられているメアリー・シーコールの今日的意義は、①看護職という仕事一般に対する意義、②年齢に関わらず生涯を通じて挑戦する姿勢、③黒人やマイノリティに対する社会的障壁に屈さない姿勢、の 3 つの観点からまとめられている。

第一に、シーコールの看護職に対するあり方そのものが、今日における看護職一般においても高く評価されている。シーコールは、地位や敵対関係に関わらず、負傷者に安らぎの場所を提供し、患者の要求に耳を傾けながら医療ケアを行った。さらに、シーコールが自身で診断を行い、軽い手術や薬の供給をするといった実践的な関わり方が、今日の看護職においても通じる点となっているのであろう。

第二に、シーコールは年齢の壁によらず、看護職としての任務を遂行するために挑戦を続けた。クリミア戦争の現地に赴いたとき、シーコールは 50 代であった。シーコールはむしろ、それまでのキャリアにおける看護実践の中で身につけてきたスキルを活かし、戦地で看護にあたったのである。

第三に、シーコールは当時の社会状況の中で、人種差別に直面しながらも、それに屈することなく、看護の業績を上げた。本書の中でも、看護職とは「インクルーシヴな職業」

であると主張されている。看護の現場においては、黒人やマイノリティの看護師を排除・差別は許されず、むしろ多様性が強みとなるという。同時に、人種や信条に関わらない全ての人が、医療ケアに対するニーズを要求しているのであり、それに応えていくことが看護職のプロフェッショナリズムであることを、シーコールの功績が示唆していると考えられる。

本書は、19 世紀における医療実践を開拓した人物の一人であるメアリー・シーコールの記憶を看護師や学生に伝えるための「リソース」として、彼女の経歴や歴史的な意義、そして今日に継承される論点をコンパクトに分かりやすくまとめた資料となっている。今後、この「リソース」を一つの足がかりとして、日本でもシーコールの存在が認知されていくとともに、彼女の複雑なアイデンティティや医療専門職としてのプロフェッショナリズムに対する研究がより深められていくことで、日本における医療専門職の育成へさらなる示唆が得られるだろう。

≪参考文献≫

岩田恵里子「あなたの知らないナイチンゲール：米国ナースが目指す 21 世紀の看護マインド　“黒人のナイチンゲール”メアリー・シーコールの功績をたどる」『Nursing BUSINESS』メディカ出版、2013 年 7 月号、pp.62-65
囹府寺彩「奴隷制末期におけるジャマイカ社会の変化　－職能的・人種的秩序の形成と〈自由人化〉」『農業史研究』第 39 号、2005、pp.48－59
田村直俊「もう 1 人のクリミアの天使 Mary Seacole（1805-81)」『埼玉医科大学短期大学紀要』第 23 号、2012、pp.1-6
中村和恵「クレオールの女：植民地と、ジェンダーおよび人種イデオロギーの交差」『比較文学研究』第 72 号、1998、pp.70-87
山下重一『J.S.ミルとジャマイカ事件』御茶の水書房、1998
渡邊洋子・柴原真知子「イギリスにおける女性医療専門職の誕生と養成・支援活動　－パイオニア女性のキャリア確立プロセスに関する成人教育的考察から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 59 号、2013、pp.99－123

Anionwu, E. N. (2005) *A short history of Mary Seacole –a resource for nurses and students*, The Royal College of Nursing
Fish, Cheryl J. (2004), *Black and white women's travel narratives : antebellum explorations,* University Press of Florida
Seacole, Mary (1988) *Wonderful Adventures of Mrs. Seacole in Many Lands*, Oxford University Press

---

[1] 日本におけるメアリー・シーコールに関する先行研究としては、岩田恵里子「あなたの知らないナイチンゲール：米国ナースが目指す 21 世紀の看護マインド　“黒人のナイチン

ゲール”メアリー・シーコールの功績をたどる」『Nursing BUSINESS』メディカ出版、2013 年 7 月号、pp.62-65、田村直俊「もう 1 人のクリミアの天使 Mary Seacole (1805-81)」『埼玉医科大学短期大学紀要』第 23 号、2012、pp.1-6 が挙げられる。

[2] Cheryl J. Fish (2004) *Black and white women's travel narratives：antebellum explorations.* University Press of Florida, p.95

[3] Royal College of Nursing　http://www.rcn.org.uk/　(2015 年 2 月 2 日最終閲覧)

[4] 初版は、Mary Seacole (1857) *The wonderful adventure of Mrs. Seacole in Many lands.* London: James Blackwood, Paternoster Row.　その後、1988 年に Oxford University Press が、さらに 2005 年には Penguin Classics が同書を再版している。

[5] 山下重一『J.S.ミルとジャマイカ事件』御茶の水書房、1998、pp.12-28

[6]囲府寺彩「奴隷制末期におけるジャマイカ社会の変化　ー職能的・人種的秩序の形成と〈自由人化〉」『農業史研究』第 39 号、2005、p.48

[7] 同上、pp.49-50

[8]　同上、p.52

[9] 同上、pp.54-55

[10] 中村和恵「クレオールの女：植民地と、ジェンダーおよび人種イデオロギーの交差」『比較文学研究』第 72 号、1998、pp.70-87

[11] 本書、p.6

[12] Seacole, Mary (1988) *Wonderful Adventures of Mrs. Seacole in Many Lands*, Oxford University Press, p.30

[13] 本書、p.11

[14] 同上

[15] Seacole, op. cit., p.73

[16] Alexander Z (1990) Let it lie upon the table: the status of black women's biography in the UK, *Gender & History,* Vol 2 (No 1) , pp.22-33 ; Kerr P, Pye P, Cherfas T, Gold M and Mulvihill M et al (2000) *The Crimean War* , London: Channel 4 Books

[17] 本書、p.29

[18] Seacole, op. cit., pp.90－91

[19] Ibid.

[20] しかしながら、シーコール自身は施設内で酒類を乱用して酔っぱらったり、ギャンブルをしたりすることは許さなかったと述べており(Seacole, op. cit., p.145)、ナイティンゲールの記述とは矛盾がある。

[21] 1859 年から 1980 年にかけての RCN の参考文献の中で、ナイティンゲールに言及した文献数は 94 に上るのに対し、シーコールは 3 つに止まっている。(本書、p.25)

[22] 2002 年、BBC が「100 人の偉大なイギリス人」というキャンペーンを発案し、ウィンストン・チャーチルが一位となった。この運動から派生して、2003 年に「100 人の偉大な黒人のイギリス人」というキャンペーンがネット上で実施された。
http://www.100greatblackbritons.com/home.html　(2015 年 1 月 20 日最終閲覧)